

わが国の歯科の歴史では、循環的に歯内療法の「復興」が生ずるという。1980年代後半から1990年代前半までは、衰微期だったように思う。1990年代の中ごろから、歯内療法が大きく動いた。彎曲根管への対応としてニッケルチタンファイルの普及、手術用顕微鏡の使用による明視の治療、CBCTによる詳細な画像診断の3つを代表として、パラダイムシフトの時代へと突入し、ブレイクした。その動静は、ミレニアムを迎え加速し、2010年代に入ると、歯内療法の一大ブームが演出された。2015年ごろからは、歯内療法関連の多数の連載や書籍が発刊され、歯内療法本の出版が活況を呈している。その結果、それまでの「私の歯内療法」から、Evidence Based Medicineの歯内療法が確立されてきた。

このような賑わいのなかで、歯内療法のパラダイムシフトは、臨床に的確に反映されているのだろうか。

“ニッケルチタンファイルを使えば、彎曲根管の治療が抜群にうまくでき、より治癒する？”

——そんなに簡単な話ではない。標準治療の基本を遵守しなければ、ニッケルチタンファイルを使っても治癒に貢献するわけではない。

“顕微鏡を使えば、根管治療の成績がよくなる？”

——顕微鏡で見えるからといって、根管治療を上手にできるわけではなく、根管のあらゆる部分がすべて見えるわけでもない。

“CBCTの画像診断によって3次元構造が把握できるから、より良好な治療ができる？”

——診断の精度が上がっても、治療が技術的にうまくできるようになるわけではない。

こんな疑問と心の声が上がってくるのは、編者だけだろうか。

わが国の歯内療法においては、いまだに40年前の時点で時計を止め、そのころと同様の根管治療が行われている状況も、少なからずある。さらに、数

多くの myths（神話）が存在する。それは、作り話や根拠の薄い臨床通念、大家の語った説などである。編者は、それらがある時代では意義があったことを認め、先達の成し遂げた業績に深いリスペクトを抱き、彼らの歯内療法分野での高尚な哲学を学び尊重したいと考えている。そこからは、革新が必要である。

本書は、“エンドの達人（ベテラン）”や新進気鋭の若手が歯内療法のエキスパートとしての極意を解説し、これらを会得すると、読者の誰もが“エンドの達人”になれることを目論んで上梓した。各コンテンツとして、執筆者に依頼したことは、以下の点を含むことであった。

- ◎フィロソフィーがあり、ナラティブ（物語的）であること
- ◎筆者の背景、エンドエキスパートを志したきっかけ、教わった先生や師匠との出会いなど
- ◎各自が一貫して保持している（保持していきたい）思想や哲学
- ◎「私の歯内療法」という主張ではなく、読者が読んだ後、それぞれの環境下で（開業・勤務問わず）建設的に治療システムを構築できること

月刊デンタルダイヤモンドでの連載（めざせ！ エンドエキスパートへの道）は、各回の繋がりがわかりにくく、飛躍的、断片的に感じた読者もいたかもしれない。本書をまとめるにあたり、連載全14回と追加項目により、歯内療法の全体系としての体をなしたものと確信している。読者の歯内療法臨床の一助となれば、幸いである。

最後に、ご多忙にもかかわらず、快くご執筆を引き受けていただいた筆者の皆様に、心より感謝を申し上げる。

2020年12月
編集委員 佐藤暢也